



## コロナ禍であらわになった貧困

今、コロナ禍で生活が大変になっている人が大勢います。今年の年末年始とゴールデンウィークには、東京・麹町の聖イグナチオ教会で大人食堂が取り組まれ、食料配布などが行われました。

私も取材させてもらったのですが、支援団体の方たちによると、これまでは食料をもらいに来るのは年配の男性が中心だったけれど、今回は小さな子ども連れの女性や大学生、そして外国籍の方が増えているとのことでした。

コロナ禍によって、若い女性の自殺が増えているなど貧困の問題が深刻になっています。ただし、それは年末年始やゴールデンウィークの前から指摘されていたことです。先回りする対策が必要だったのに、行われなかったことに大きな問題があります。

大人食堂の現場を見て真っ先に感じたのは、「公助はどこへ行った?」でした。今の政権はすぐに「自助」と言いますが、私にはそれが「自己責任」「自業自得」という言葉に聞こえます。自助・自己責任を言う前に、どれだけ国や自治体が責任を果たしてきたのか、とても疑問を感じています。

### 生活が苦しいのは、あなたのせいじゃない

自殺対策のキャンペーンに採用された言葉で、私が大切にしている言葉があるのですが、それは「弱かったのは個人の方ではなく、社会の支える力でした」です。この言葉を、今コロナ禍などで苦しんでいる人に届けたいと思います。

今、生活が苦しいのは、みなさんの責任ではなく、社会

のセーフティネットや支える力が弱いのが問題です。決して自分を責めないでください。しかるべき「公助」が投入されるべきですし、支援団体や労働組合などでセーフティネットを作ろうと頑張っている人たちもいます。そういう意味では、あなたはひとりぼっちではありません。

私は現在、毎週水曜日から午後9時から、YouTubeでラジオ型番組「Dialogue for People」を配信しています。テーマはさまざまで、最近では入管法改正問題や障害者とバリアフリー、ユニバーサルデザインなどを取り上げました。社会的に弱い立場に置かれているマイノリティーの声を置き去りにされない社会をめざしています。社会の問題に気づき、声をあげるきっかけにもなればうれしいですね。



### 居酒屋の店長だった兄の過労死

私には13歳違いの兄がいました。居酒屋で店長をしていたのですが、何カ月も休みなしに働かされ、過労で亡くなりました。私がまだ中学生の時のことです。労災は認められましたが、だからといって亡くなった人の命は戻ってきません。

ともすれば労働者は、大きな企業を前にして声をあげることすらできず、場合によっては死に追いやられることもあります。「NO」と言えず、自分の責任だと抱え込んでしまう。大きな声を前にしたら、1人の声ではかき消されてしまいます。「それっておかしいよ」「おかしいって声をあげていいんだよ」。そう言えるための、連帯する場が必要です。労働組合を作って、そこから声をあげていくことは、社会を変えるためにとても意義のあることだと思います。

やすだ なつき ● 1987年神奈川県生まれ。NPO法人Dialogue for People(ダイアログフォーピープル/D4P)所属フォトジャーナリスト。同団体の副代表。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。著書に『写真で伝える仕事—世界の子どもたちと向き合って—』(日本写真企画)、他。現在、TBSテレビ『サンデーモーニング』にコメンテーターとして出演中。

# 声をあげるために“連帯”しよう

## 労働組合はなぜ必要なのか



フォトジャーナリスト

安田 菜津紀さん



## 労働相談、労働組合づくり、加入受付中!

コロナ関連の休業や失業、賃金カット。  
あきらめずに相談を!

働くことで  
**困**ったら。

相談無料  
秘密厳守



0120-378-060

メール相談・全国の労働相談センターはこちら▼

パート、アルバイト、派遣、正社員・職員など雇用条件や職種、国籍を問わずに、全国どこでも、一人でも入れる労働組合があります。働くことで困ったら迷わず相談を! あなたの街の労働相談センターにつながります。

